

# 活動報告書

報告者氏名： 井上 賞子

所属： 松江市立意東小学校

記録日： 27年 2月9日

## 【対象児の情報】

○学年 6年

○障害名 読み書きの困難、コミュニケーションの苦手さ

○障害と困難の内容

- ・知的には高いがコミュニケーションの課題が大きく、激しい不応状態も見られる。
- ・読み、書きに特異的な困難がある。苦手意識も強く、取り組みへの抵抗も大きい。
- ・学習への見通しが持ちづらく、定着への取り組みが継続しにくい。

## 【活動目的】

○当初のねらい ・代替え手段を持つことで、学びやすさを支え、学習機会を保障していく。

○実施期間 4月から2月

○実施者 井上 賞子

○実施者と対象児の関係 担任

## 【活動内容と対象児の変化】

### ○対象児の事前の状況

- ・計算は早く正確。
- ・記憶力が優れており、将棋の棋譜や県名や国名などは、正確にたくさん覚えている。
- ・見通しの持てた活動は、集中して取り組むことができる。
- ・書きに困難があり、整った文字を書くことは難しい。
- ・読みに困難があり、今までの失敗体験もあって、読むことへの抵抗感が大きい。
- ・コミュニケーションに苦手さがあり、自分の思いを言葉にしたり、周囲と思いを伝え合ったりすることに課題がある。
- ・理解力も高く、学年の内容の学習が可能な状態でありながら、従来の学習方法では苦手さの大きい部分が壁になり、学習機会の保障が図られていなかったと思われる。

### ○活動の具体的内容

- ①「読み」の底上げと見通しを支えるツールとして→「VoiceOfDaisy」「i 暗記」「例解学習国語辞典」  
[漢字ドリル]「Safari」を活用
- ②「書き」の見通しを支えるツールとして→「小1かん字ドリル 楽しく学べる漢字シリーズ」「camera」
- ③考えをまとめるツールとして→「SimpleMind+」「7notes」
- ④思いを伝え合うツールとして→「ByTalk」を活用



### ○対象児の事後の変化

- ①を通じて「読み」の底上げと見通しを支える

☆「かなり優しい文章でも、読解は難しい」「漢字は低学年のものでも読めないものが多い」という引き継ぎを受けていたが、算数の課題の理解度の高さや、抽象的な内容でも説明を聞くとわかる様子から、理解の力はあるながら、文字を音に変えていくという部分への苦手さが、学習の状況に影響していることが予想された。ま

た、「漢字の複数の読み方に混乱して、定着が進みにくい」という引き継ぎも受けていたが、家庭ではパソコンを使いこなして web で必要な情報を得ているとのことだったり、算数の課題を読む姿から、読み間違いはありつつも意味としては取れている様子が見られたため、熟語とその音の一致を図っていくことで、読みの流暢性を支えていけるのではないかと考えた。そこで、「音を補う」「音と文字を関連付ける」「動画でイメージ化を図ってから読む」取り組みを行ってきている。

・ **VoiceOfDaisy** → イメージしやすい説明文教材にしぼって、2年、3年、4年生のものをダウンロードして、読み上げさせながら読解を行った。読み終わってからいくつかの質問を試してみたところ、よく理解している様子だった。国語の時間の課題の一つとして読み上げを追いながら黙読していき、5回読み終わったところで読解の小テストを実施してみたところ、問われている内容が書かれている場所を自力で探して正確に答えることが出来た。(図 1)

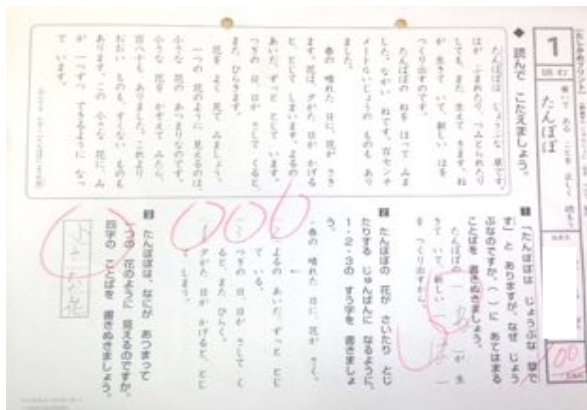


図 1 読解の小テスト

・ **暗記** → 新出漢字を熟語ごとカード化して繰り返し練習に取り組んだ。カード化していく段階で、入力作業を通じて音と文字の確認を何度もしており、聞きなれた言葉であれば、それだけでも記憶に残る様子が見られた。(図 2) カードを使っただけの練習も、操作がシンプルで課題が明快なこともあり、抵抗なく繰り返す姿が見られた。(図 3) だんだんと熟語を見て読みを答えることがスムーズになっていき、80枚のカードを数分でクリアできるようになった。リズムよく学習できるので、集中も継続している。2月現在、6年生で学習する新出漢字は全てスムーズに読むことが出来る。復習で始めた5年生4年生の漢字についても、すらすらと読めるようになっている。1～3年生の漢字は、取り上げて学習をしてきてはいないが、読める熟語が増える中で習得が進んでおり、卒業までには、ほぼ小学校で習うものについては熟語での読みが出来る状態になると予想している。

ドリルを見ながらカードを作成。



図 2 カードに入力している様子

表示をどんどん切り替えながら練習。



図 3 練習モードで解答している様子

・ **漢字ドリル+例解学習国語辞典** → 復習と確認の手だてを広げる学習で活用している。漢字ドリルは、熟語の読みを入力して答える形になっており、「想起する」「入力する」を繰り返しながら定着につなげることを意図している。出題される漢字は学年ごとに分かれているが、たとえ一年生の漢字でも、語彙は上学年で出てくる難しいものも含まれている。そのため「簡単だ」と始めたにもかかわらず、考え込んで進めない場面も出てきている。そうした際に「調べて解決する」手だてとして例解学習国語辞典を当初は想定していた。手書き入力で読みを調べられるため、読めない熟語があっても自力で解決することが出来ると考えたが、「漢字ドリル」ではパスをすると正解が表示されるため、辞典を使わずにそれを確認して進めていくようになった。まずは「想起する」ことを試みて考え、わからない時には「調べて」解決することを繰り返しながら、既習事項の定着につなげたいと考えていたが、対象児童は「想起する」わからない時は「解答で確認する」という方法で繰り返して定着へつなげていった。自分なりの学びやすさを見つけ進めていたと感じている。



図 4 漢字ドリル画面

ここで覚えた「調べる」手だてについては、「意味調べ」の活動として、他の学習場面で活用していった。調

べることはすぐに覚え、目的の語彙が見つからない時はネットでウィキペディアを使ったり、2つの言葉をつなげて意味を補完したりするなど、自分なりの活用方法も模索することが出来てきている。

・safari→理科、社会の学習の際、「事前」と「事後」にNHKforSchoolの動画を視聴している。引継ぎでは、こうした動画教材へもあまり興味をしめさず集中が継続しないと聞いていたが、家庭でパソコンを使いこなしているエピソードなどから、「動画を見ることや理解に課題があるというよりも、大きな画面や距離のある画面での視聴では注意が散りやすいのかもしれない」と予測した。iPadを使って手元で視聴している様子を見ると、しっかりと集中して、内容もよく理解していることがうかがえた。社会や理科は新出の用語も多く、混乱もしやすいが、動画で学習内容をイメージ化しておくことで、理解が容易になっている。一度、課題のプリントに取り組んでいた際、まだ学習していない「卑弥呼」に関する設問が入っていたことがあった。○つけをするまで気付かなかったが、正解を答えていたので、「ここまでやってなかったよね。よくわかったね」と声をかけると「動画で見たのに入ってた」と答えていた。

※本来、理解力の高い児童であり、「苦手だ」「できない」とされていた様々な事柄も、手段があることでスムーズになったり、学習機会が保障されることで定着が進んだりという姿につながっていると感じている。読みのネックの1つであった漢字についても、本人の自尊感情も考えて、「まずは自分の学年」の課題をクリアした上で、落としてきた既習事項を補う形で進めてきたことで、「できる自分」「やれる方法」への見通しが持てるようになってきている。「読む」ことへの抵抗感は明らかに軽減していると感じる。特に苦手意識の強かった「漢字」については、むしろ「この字は〇〇とも読むよね」といった発言も聞かれるなど、意欲的に読もうとする姿も増えてきている。

※読解については、2学期からは社会の教科書を題材として進めてきている。デイジーとNHKforSchoolでイメージをしてから内容に入っていくことで、6年生の内容についてもスムーズに理解していく姿が見られている。

### ②を通じて「書き」の見通しを支える

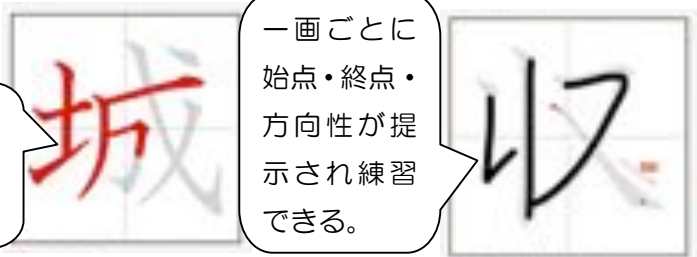
☆筆圧が弱く、不器用さがあり、なぞり書きをしても何を書いているのかわからなくなりがちだった。そうした体験を重ねてきていることもあり、書くことそのものへの抵抗感も高かった。そこで、画数の多い6年生の漢字を学習していくには、まず構成や線の方向性を捉えなおしてから書きやすい用紙で学習していくというプロセスを考えて取り組んできている。

・小1かん字ドリル 楽しく学べる漢字シリーズ→熟語の読みが音声で、書き順が動画で示された後、始点・終点・方向性を1画毎に表示しての練習に取り組める。最初は、始点から終点までつながっていればでたらめな線を引いても合格することに気づいて、少しふざけて書きなぐる様子も見られたが、始点と終点の意識はできていたので、とくに咎めずにいたら、次第に普通に練習するようになっていった。5回iPadで練習した後、書き込みドリルに書いていくという組み合わせで学習してきている。画数の多い漢字でも、一度捉え直しをしてから書くことで、正確に書くことができるようになってきている。

図5 楽しく学べる漢字シリーズ画面

アプリで捉えなおした後、書き込みドリルで練習

アニメーションで書き順を確認



一画ごとに始点・終点・方向性が提示され練習できる。



図6 捉えなおし後の漢字ドリル



・camera→書き込みドリルを使っている、解答を他ページで確認しながら進む場面が出てくる。「正しく書きたい」という気持ちを持っており、うまく書けなかったりどこを書いているかわからなくなるといららする様子が見られることから、cameraで確認するページを写真にとって、手元で拡大して表示させることをしてきている。(図7)やり方をすぐに覚え、他の場面でもcameraで撮っておくことを自分でやり始めている。必要な時に撮るだけでなく、事前に解答ページを写真に撮っておいて、必要な時はカメラロールから探して使うというやり方も、自分で見つけた。



図7 拡大表示させてお手本にしている様子

※本児の実態から考えると、「丁寧に」を過度に求めるより「書くことができる」ことを優先させていくことが有効だと感じている。形の取りにくさはあるものの、そこは操作性の課題が大きいと思われる。現状でも要素はきちんととれているため、記号としての文字の働きはしっかりと果たすことが出来ている。入力は巧みで早い児童であり、「複雑な内容や長文は入力していく」「手書きでないといけない場面で困らないよう、手書きの練習も過度な負担にならないように継続していく」ことを目指してきた。掃除の分担表や委員会の用紙などを書く際、「漢字を使おうとする」姿が増えてきている。



図8 小さなお手本を見て書ける姿

※正しく書ける手だてを保障しての体験を重ねる中で、苦手さの大きい「書き」についても大きく改善してきている。現在はcameraを使わなくても、一瞬解答を見るだけで「ああ、あの字か」と想起して書くことが出来る。図8は、細かな解答の文字を見て、書きとっている場面である。想起できる字も増えており、そういう場合は解答を見ない。わからない時もちらりと見るだけで書けるようになってきている。以前のように拡大したお手本を必要としない姿に、既習事項の定着と、漢字を書くことへの負荷が下がってきていることを感じている。

### ③を通じて「考えをまとめる」

☆思いを言葉にすることが苦手であり、出来事を文章にしていくことにも「わからん」「忘れた」と抵抗が大きかった。何をどう伝えたらいいのかわからない様子が見通しが立ちにくい様子がうかがえたため、可視化していくことで考えをまとめやすくするとともに、テキストにすることで、読み返して考えることを容易にしたいと考えた。

・SimpleMind+→単語を書き込んでいながら並べなおしたりつなぎかえたりすることが容易にできるため、抵抗感少なく取り組めた。テーマの次に「一番楽しかったのは」等、書き出しをメモしておくことで、その先がスムーズに出てくる様子が見られた。

・7notes→マインドマップで作ったメモを見ながら、文章化していった。3つの入力方法+音声入力ができることを伝え、入力方法を選んだ。本児はローマ字もよく覚えており、家庭のパソコンではローマ字入力を行ってきていることから、ローマ字打ちも可能だが、一通り全部を試してみた後、50音キーボードを選んだ。ローマ字だとキーの場所を探したり、ローマ字に自分が書きたいことを変換するのに多少時間がかかるようだが、50音キーボードだと、すぐに位置を覚えて、かなり早く入力することが出来ていた。メモを見ながら足りない言葉を補いつつ、あっという間に作文を仕上げることが出来た。(図9)

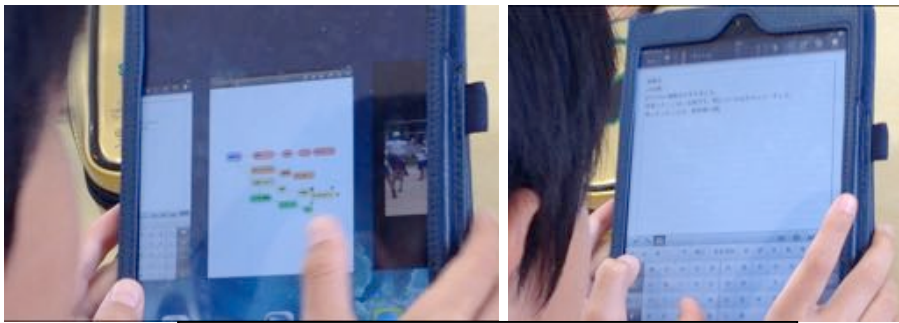


図 9 2つのアプリを切り替えながら作文を書いている様子



図 10 できあがった作文

※運動会の作文(図 10)には比較的スムーズに取り組めたが、「思いを書く」という場面になると、表情が険しくなり辛そうな様子が見られることがある。対象児童の中で[思いを書く]という活動に関しては、消化できていないものがあるのではないかと推察された。そこで、まずは「考えたことを文章にできる」を目指して、教科学習の中で「要約」することに主に進めている。その際も、キーワードを整理できるマインドマップは有効な手段になっている。

#### ④を通じて「思いを伝え合う」

☆聞きたいことや話したいことを一方的に話すことはあっても、感想を話したり質問に答えたりすることには、苦手さがあると感じている。一方で家庭内ではメールを日常的にしていたり、担任に確認したいことを保護者を通じてショートメールで訪ねてきたりする様子から、短い文章を機器を使ってやりとりすることで、気持ちを伝え合う機会にすることができるのではないかと考えた。

・ByTalk→リアルタイムでのやり取りが可能であり、既読を確認できることから、閉じた SNS を使うことで、まずは担任とのやりとりを広げていきたいと考えた。当初はあまり興味を示さず、スタンプをたくさん押ししたり、キーをただ押し続けたりしたメッセージが届いていただけだった。(図 11)ある日、理科の時間に他の iPad を使って NHKForSchool を視聴していた際、他の児童を指導していた担任へ、リアルタイムで動画の感想を送ってきた。(図 12)そこには本当に自然な反応が書かれており、思いを持って見ていてくれることがよくわかった。そこからは、時々ではあるが、ByTalk の中で一定量のやりとりができるようになってきている。(図 13.14)担任が不在の時より、目の前に姿がある時にメッセージが来ることが多く、本児からのメッセージを読んだ担任の様子も含めて楽しんでいる様子が見られる。写真を送って確認するというような場面でも、自分の思いが正確に伝わったことを喜ぶ姿が見られた。(図 15)



図 11 最初のころの画面



図 12 理科の時間に送ってきたメッセージの画面

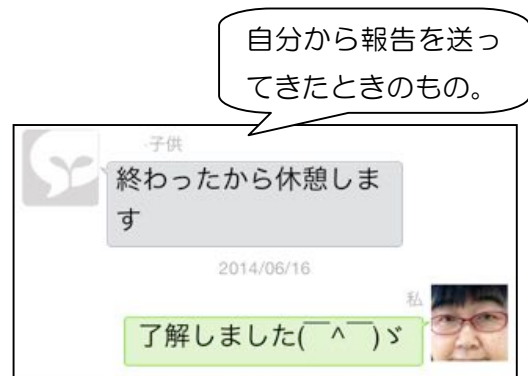
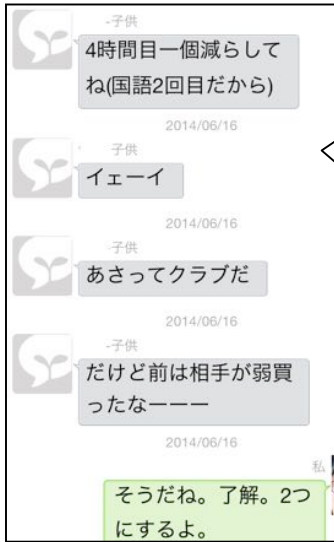


図 13 送ってきたメッセージの例①



国語の時間の課題数の交渉をしてきたときのもの(いつもは1時間に3つの課題)

離れた場所にいる時、画像を送って確認した時のもの



図 15 画像で確認した時の画面

図 14 送ってきたメッセージの例②

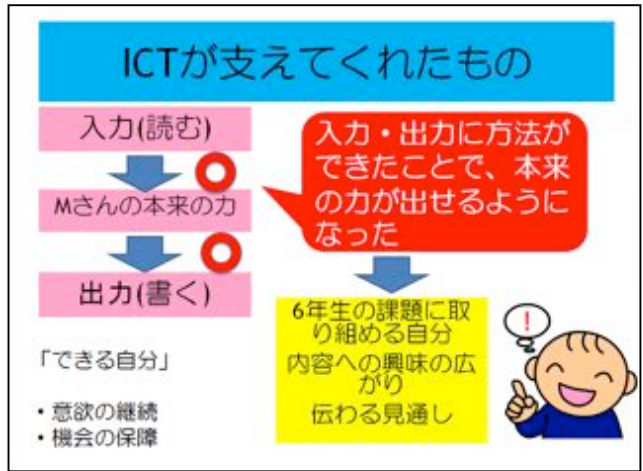
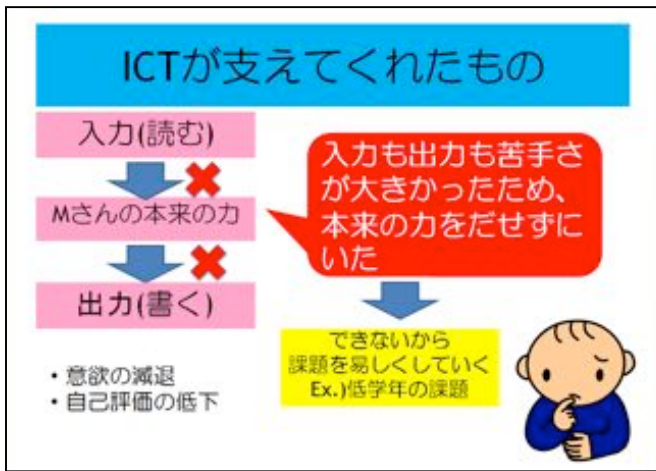
※目の前にいてもショートメッセージを打ち込む方が、本児にとっては思いを伝えやすい時もあるように感じている。むしろ、目の前にいるからこそ聞きたいことや伝えたいことが生まれている。そのまま言葉にすることは得意な子ではないが、自分にとって安心できる方法、可能な手段をとることで、思いを伝えることが出来る場面を増やしていってほしいと考えている。

【報告者の気づきとエビデンス】

○報告者の主観的気づき

☆方法を持てたことで、学習の機会が保障され、対象児童の本来の力が発揮できるようになったのではないかと

☆「学べる自分」への見通しが、学習への意欲を支えたのではないかと



○主観的気づきに関するエビデンス

①「読み」の底上げと見通しを支えるに関して

・熟語が読めるようになってきたことで、文章の量や内容によっては、読み上げがなくても読解に取り組みめるようになってきている。右は「→で解答」という方法をとって取り組んだ読解プリントだが、図 16 くらいの文章量であれば、あっという間に正解を示すことができる。図 17 の文章量であっても、じっくり考えて読み返しなが、1人で正解を導くことができる。いずれも初見の文章である。

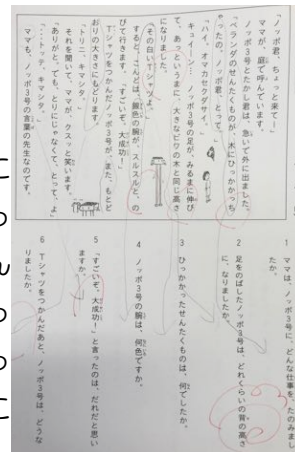


図 17 矢印解答プリント②

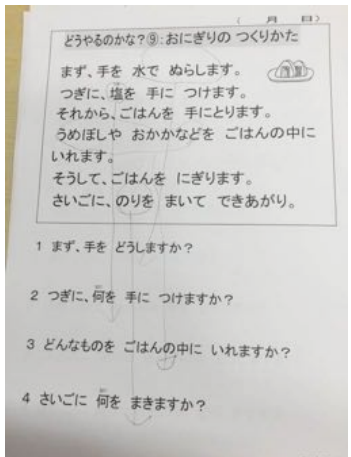


図 16 矢印解答プリント①

・社会や理科のテストに、1人で取り組みえるようになってきている。自学年の課題であっても、短い文章であれば自分で読んで解決しようとする。読めない熟語があっ

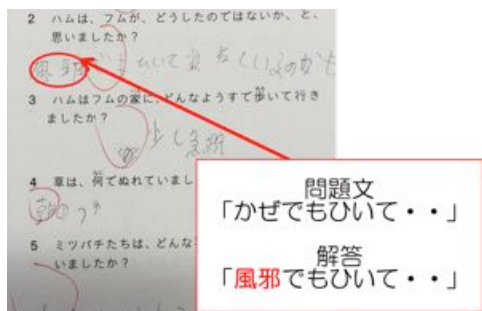
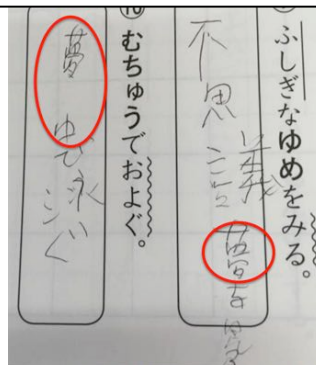


た場合でも、前後の関係を見ながら意味を推察する様子も見られた。

図 18 求められていない部分も漢字で①

### ②「書き」の見通しを支えるに関して

- ・求められていない場面でも、漢字で書こうとすることが増えてきている。
- ・図 18 は、赤丸の部分は漢字で書くことを求められていなかったが「ここは漢字でしょう」と言って書き始めた。



- ・図 19 では、問題文には平仮名で書かれていた部分を自分で漢字に変えて答えている。
- ・担任がひらがなを使うと「何で漢字を書かんのか?」と聞いてくるなど、「漢字の部分は漢字で」という意欲を随所で感じるようになってきている。

図 19 求められていない部分も漢字で②

### ③「考えをまとめる」に関して

卒業文集を書いていた時、「将来の夢」について文章を書くことがあった。その際、ヒントになるようにと「行ってみたいところ」「してみたいこと」「つきたい仕事」「食べてみたいもの」などの項目を挙げて解答例もつけて提示したが「なにもない」と書いて書こうとしなかった。「じゃあ、「今はない」ということを書いてはどうだろう」と提案すると、納得して書き始めた。



図 20 パソコンで要旨をまとめている様子

自分の思いを言葉にすることに対しては、依然として慎重な様子が見られるが、納得したことや客観的な事実に対しては、文章化することができるようになってきている。右の図 20 は、デイジーで教科書を提示しながら、パソコンに入力して答えている場面である。手掛かりを持ってのまとめや要旨の入力は、正確で素早くできるようになってきている。

### ④[思いを伝え合う]に関して

3学期の始め、訪問指導での授業公開が予定されていた。本児の思いや状況によって中止することも視野に入れていたが「あなたががんばっていることをたくさんの先生に見てほしいと願っている」ということを予告していたこともあり、前日までは本人もやる気でした。しかし、当日、不安になったようでメッセージが送ら

れてきた。それはお母さんのアドレスから送られており、担任も母親が書いていると思って返答していたが、実は本人が書いたものだった。不安な気持ちやそれでも何かできることはしたいと交渉する姿を後から見返して、驚いた。結局30分ほどやり取りをした後登校してきたが、とてもすっきりした表情で、納得して授業に向かっていた。彼がこの思いを対面で伝えることは、まだ難しいのか

訪問指導当日の朝、お母さんのアドレスからメッセージがとどいた。後で聞いたら書いていたのは本人

行くの遅くなります

頭痛いそうなので3時間目に行きます

3時間目勉強じゃないことしか出来ませんのでそれをお願いします。

よろしくお願いします。

勉強は無理です。勉強以外のことならやるそうです。

iPadかパソコンならやるそうです。

それか何とかバスケット

いない方がいいそうです。

また気がいい時にして下さい。

よろしくお願いします

中学の先生は来てもらっていいそうです。

**不安な思い** → **これならできるかも一交渉へ** → **自信のある活動 参観者の人数と対象** → **今から向かいます**

もしれない。しかし、メッセージで伝えるという方法を持っていたことと、お母さんの姿をかりたことで、それが可能になったのだと感じた。自分の思いを伝え、相手の意見を聞いて考え、対案を提案して交渉する。方

法を持つことで彼の世界は広がってきていると感じている。

#### ○特徴的なエピソード

委員会活動の前の時間に、図書室で司書さんの前で宿題の漢字学習ノートを開いていた。彼が書くことに苦手さがあることを知っている司書さんは「難しいのやってるね」と声をかけると、嬉しそうな様子であったようだ。その時間に宿題をやる必要はなかったが「6年生の学習をしている」という自分を見てほしかったのではないかと感じている。

本児にとって、「自分の学年の学習ができる」ということは、何よりのモチベーションにつながったのではないかと感じる場面は、他にも多く見られた。



図 21 図書室で開いていた漢字学習ノート



## 【今後の見通し】

- ・ 中学進学が目前であり、本児の「学びやすさ」をどうつなげていくのかが重要になってくると考える。
- ・ そのために2つの視点での取り組みを重ねてきている。

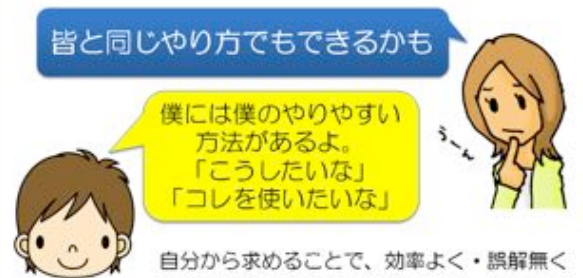
### ①「必要な方法」としての自分で要求、選択できるようにしていく

→「こうすればできる」という見通しを重ね、「だからこうしたい」にひろげていく

※「教師から提示⇒使える」ではなく

- 「長い文章は読み上げだとわかるからそっちがいい」
- 「漢字や単語の勉強は紙じゃなくて入力が見たい」
- 「動画があれば先に見たい」

☆中学進学後にもMさんの手だてにしていきたいために



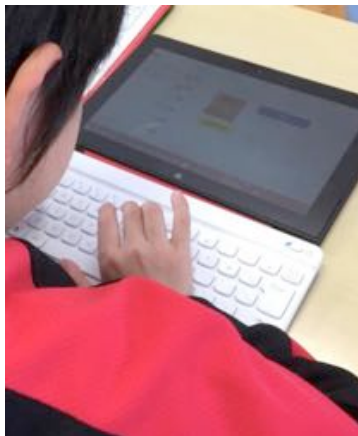
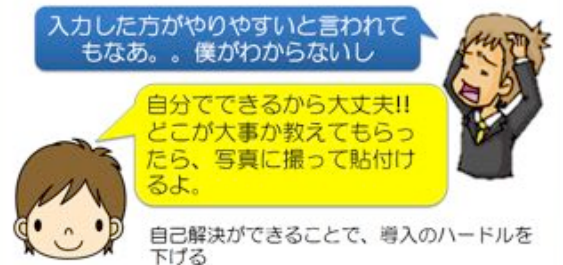
### ②ノートテイクなど、指導者が変わっても継続して活用できるスキルをつけていく

→教科や内容が増えたとき、自分で情報を整理していくことを目指していく

※全てを皆と同じように「書く」のではなく

- ・ 必要な部分を写真にとり、はりつける
- ・ マーカーで大切な部分に印をつける
- ・ 補足したい情報は、テキストで打ち込んでいく

☆中学進学後にもMさんの手だてにしていきたいために



### ☆ノートテイクの方法や端末を選択するに際して考えたこと

- ・ 中学では教科担任制なので、どの先生の授業でも使える方法が必要では？
- ・ 情報の量が増えて来たとき、一括で確認できる方法が有効では？
- ・ 「調べる」「まとめる」時、二画面表示ができた方が考えやすいのでは？

上記の点を考えて、現在 Windows タブレットを使って、OneNote を活用してのノートテイクを行っている。

図 22 Windows タブレットを使って、社会のまとめをしている様子

- ・ 中学の先生との情報交換も行っているが、松江市が行っている[小中一貫]の取り組みの中で、進学後も中学の担任の先生や本人との関わりを継続できないか、模索中である。

対象児童は、2学期の後半から、授業中によく

### 「そういうことか」

とつぶやきながら勉強している。

高い理解力を持ちながら、「自分の学び方の入り口」が見つけれず、彼は困っていたのかもしれない。「そういうことか」のつぶやきの向こうには、たくさんの点が線のようにつながって、学ぶことを楽しんでいる彼の思いがうかがわれる。

彼の「そういうことか」が中学という次のステージにもつながっていくように、中学との連携を図っていきたい。